『魔の山』について

― 対話形式による作品論の試み ―

武田修志

(昭和53年5月25日受理)

はじめに，遊びがすぎるとも不遜とも取られかねない対話形式を用いて作品論を行うことに対して、簡単に弁明しておきたい。対話形式を用いようと思い立ったのは，第一に，単純で，はなはだ消極的な理由からである。つまり，この関連の多い小説の内部に立入ろうとして，対話形式という道を通って行くほか他のどんな道によってもそれが不可能だったからである。第二に，研究方法は研究対象のうちに見出さるべしという一つの方法論を，形式にまで敷衍しても必ずしも不都合ではあるまいと考えたからである。つまり，『魔の山』においては，非常に多くの重要な問題が，対話の形式で展開される。それを借用したのである。

ところで，ここに言うLとは，極く普通の（と筆者に考えられる）トーマス・マンのLeser，Fとは，この作家の作品をまがりなりにも原文で読むことができ，Lよりもなにがしか文学的教養を積んでいるsein Freund。この単簡な設定によって筆者が目差しているものは，この作品に対するいくばくかの解説的寄与である。

1

L：『魔の山』を二回読んだ。作者の忠告に忠実に従ってね。

F：『魔の山』はトーマス・マンの作品の中でも、最も広く読まれているものだろうけれど，一読して，ものすごくおもしろかったという感想は聞いたことがない。どうしても再読，三読される必要があるようです。マンが言っているように，「この作品が形成している音楽的・観念的な関係複合体 der musikalisch-ideellen Beziehungskomplex は，読者がこの作品のテーマをすでに知っており，象徴的に奏し始められるきまり文句を，ただ単に物語の後方のみでなく，前方に向っても解釈することができる場合に初めて，正しく見通され，享受されうる[1]」からだろうか。

L：それはともかく、小説というものは，もう暇に飽かせて，言わば好奇心の強い散策者みたいに脇道にそれ，いかがわしい所に首をつっこみ，もとの道を失いかけるように，そういうふうに読むものだ，と教えているような書物だよ，これは。というのは，一回目通読したとき，ぼくは，これ

はいったい何を言いたいんだ，とそればかりを追いかけた。そうしたら，何か脇道ばかりに連れて行かれるようで，何がテーマなのかさっぱり分からない。「雪」の節で，この作品の中心理念らしいものを聞かされはするがね。そこで再読する時は，この脇道にこそ意味があるんだろうと思って，腰を据えてゆっくり読んだ。そうしたら，この小説のおもしろさが分かるような気がしたんだけど。

F：それがこの作品の正しい読み方でしょう。脇道にそれ，ほとんど自分を失いかけるようにして読む。これはどんな小説を読む場合にも言えることだろうけれど，特にこの作品においてはそう言える。というのは，この「脇道にそれる」というのは，単にこの作品の読み方というにとどまらず，この作品の語っている根本思想，少なくとも根本思想の一つと思われるからです。

L：「脇道にそれる」，なるほど。このことでは，何かいろんなことが言えそうだ。例えば，「雪」の節で，主人公ハンス・カストルプは，サナトリウムの規則を破って，雪の山中へスキーではいって行き，あやうく命を失いそうになる。これも「脇道にそれる」ことですね。脇道にそれ，危い目に会うかわりに，意味深い体験をする。

F：その通りです。「脇道にそれる」ってことは，危い目に会うということ，常に危険を伴うということです。つまり，この世界で何か意味深い体験をしようと思えば，危険の中へ足を踏み入れねばならぬ —

L：ここで幾つかの場面，幾人かの登場人物の言葉が思い出されるけれども，今はその一つだけを取出してみようか。それは，第7章の「ペーペルコルン氏(続き)」の節，ハンス・カストルプとショーシャ夫人の対話の中の言葉です。ハンス・カストルプは，この対話においては，極めて精神的で繊細な事柄を，かつてなかったほど明晰な言葉で語るのだけど，この対話の半ばで，彼は次のように言う，「生へ至る道は二つある。ひとつは普通の，真っすぐな，真面目な道。もうひとつは良くない道。それは死を越えて行く道，そして，これこそ天才的な道なんだ！[(2)]」。早々に結論めいた言葉を引用したと言われるかもしれないけれど，これは結論じゃない，出発点です。たしかに，ハンス・カストルプがこのような認識に達したという意味では一つの結論かもしれない。しかし，彼が歩んで来た道，彼が歩んで行く道の出発点です。そこで先ほどの「脇道にそれる」ということと関連させてこの言葉を見れば，これほど「脇道にそれる」ことの意味を明らかにしている言葉はない。「脇道にそれる」，それは生のため，生へ至るためである。そして，言わばその脇道の真中にあるのは死であり，これを乗り越えて行かなければならない。そこでこう言えると思う，この物語，単純な青年ハンス・カストルプの物語は，彼が死を克服して生の確信へ到達する物語だと。

F：簡単にそう言切れるかどうか。ハンス・カストルプは真に死を克服し得たのだろうか。彼は本当に生の確信に到達したのだろうか。たしかに，例えば「雪」の節において，彼は，あの言わば大いなる夢の中で死を克服し，生の確信に到達したと言えるだろう。しかし，彼はあの夢をたちまち忘れてしまう。勿論，完全に忘れてしまうわけではないけれども。言葉を換えていえば，「『魔の山』が，雪の中での夢のあと三百ページ以上も続き，また例えば，ペーペルコルンのような非常に重要

な人物があの夢のあとになって導入されるのは，何を意味しているのだろうか[3]」ということです。

L：では，このハンス・カストルプの物語は，彼が死を克服せんと努め，生の確信を得んと願ったにかかわらず，それに失敗した物語ですか。物語の最後でハンス・カストルプはどうやら命を失いそうだから。

F：そうあわてなさんな。そういうことはどうでもよろしい。「脇道にそれる」というのは，そもそも，そういうことはどうでもよいということではないのか。こういう場合，いつも言われるように，大切なのはその過程でしょう。

L：それではもう一度先ほどの引用を繰り返すと ― 「生へ至る道は二つある。ひとつは普通の，真っ直ぐな，真面目な道。もうひとつは良くない道，死を越えて行く道，そしてこれが天才的な道だ」というわけだけど，ここで言われている「死」というのは，作品を読めば分かるように，文字通りの「死」を意味している。しかし，一般的に言うと所謂「ニヒリズム」，「神は死んだ」なんという言い方で19世紀半ば以降取りざたされた「ニヒリズム」と受取ることができるだろうと思う。そこで推察するに，トーマス・マンはこのヨーロッパのニヒリズムを克服せんとして『魔の山』を書いたのだろうか？

F：マンがこの作品を書き始めた当初はともかく，最初の短篇という構想から長篇へプランの変更が行なわれたのち，作者にそういう意識があったことはまちがいないでしょう。この作品の荷っている課題は，究極的には，ヨーロッパのニヒリズムの克服という課題であると。しかしながら，この小説が書かれることになった最初の動機は ― 当然そうであるべきはずのものだけど ― 非常に個人的なものです。

2

L：『「魔の山」入門』によるとトーマス・マンは，この作品が書き始められる一年以上前（1912年，5月），当時肺を病んでスイスのダヴォスのサナトリウムに入院していた奥方を見舞って，そこに三週間滞在した。この折，高山のサナトリウムという閉鎖的環境のかもしだす一種独特の雰囲気，それが病者に及ぼす特異な作用，そういうものからマンは，数々の奇妙な印象を得た。これが，この作品執筆の直接の動機ですか。

F：直接の動機。しかし，外面的な動機です。マンがダヴォスにおける四週間の滞在で，将来の創作のための様々な素材を得たとしても，それを一つの作品に仕立てようとする限り，そこには疑いなく内面的なモチーフがあるはずです。というより，内面に将来作品に形象化されるようなモチーフをいだいていたからこそマンは，ダヴォスのサナトリウムに，そのために必要な素材を見出した，というのが実情に近いでしょう。

L：マンは当時『ヴェニスに死す』を書いていて，ダヴォスに奥さんを見舞った時には，あと結末を残すだけのところまで書き進めていた。つまり，当時のマンの心を占めていたのは，『ヴェニス

に死す』に含まれた様々の問題だった……

F：そうだと思うね。『ヴェニスに死す』と『魔の山』の関係，これはどうしても見逃すことができない。ここで，君も読んだらしい『「魔の山」入門』から，この長篇小説の最初のプランに触れた部分を引用してみよう。

「私が計画した物語は（……）『ヴェニスに死す』に対するユーモラスhumoristischな対比物といった程度のものになるはずでした。大きさからいっても対比物であり，それゆえ，ただいくらか長くなった短篇小説etwas ausgedehnte short storyになるはずでした。それは，私が丁度仕上げたばかりの悲劇的短篇小説に対するサテュロス劇と考えられていました。この小説の雰囲気は，（……）死と慰みの混合物になるはずでした。死の魅惑Die Faszination des Todes，つまり『ヴェニスに死す』の中で描かれている最高の秩序に捧げられた生に対する陶酔的な混乱の勝利を，ユーモラスに描いてみようということだったのです。一人の単純な主人公。ぞっとするような冒険と市民的実直さの間の滑稽な葛藤，それが私の最初の目論見だったのです。[4]」

これは，実は，『魔の山』構想当時から30年ものち（1939年）の作者の発言だけれども，最初のプランに関してかなり正確なことが言われていると思う。というのは，最終的には大長篇小説として完結したこの作品も，今，その前半部（1章～5章）のみに注目してみると，量の点は別として，内容に関しては，ほぼ今見た計画に従って書き進められたと見ることができるからです。前半部の「雰囲気は（……）死と慰みの混合物」だと言ってよかろうし，「死の魅惑」と「勝利」が「ユーモラスに」描かれていると見てさしつかえないでしょう。また，この作品が構想された当時の書簡（1913年7月24日附，エルンスト・ベルトラム宛）にも，簡単ながら，次のような同じ主旨の言葉が見つかる。「（……）例の奇妙な長篇小説〔『詐欺師フェリクス・クルルの告白』〕は依然棚上げにしたまま，差当りもう一つ短篇Novelleを準備しています。これは『ヴェニスに死す』と対をなすユーモラスな作品になりそうです。[5]」

3

L：『ヴェニスに死す』と『魔の山』の関係。ここで，この二作品の内容上の関係を見てみる必要があると思うけれども，まず言っておいてよいと思うのは，この二作品の世界，主人公グスタフ・アシェンバハとハンス・カストルプが生きている世界の同一あるいは同質性です。それは第一次世界大戦直前のヨーロッパである，と言いたいのではない。それはその通りなんだけど，ぼくが言っているのは，両作品世界の精神的同質性です。二人の主人公が生きている世界は，ひとことで言えば，そこに生きる人々が生の意味を，意識的にしろ無意識的にしろ，問い続けているにかかわらず，それに対するあらゆる本質的な答を失なってしまった世界です。この点に関して『魔の山』においては，ハンス・カストルプの精神状態を叙したくだりに，次のような一節を読むことができる。

「人間というものは，個々の存在として個人的生活を送っていくのみならず，意識的あるいは無意

識的に，自分の生きている時代や自分の同時代人の生活をも生活していくものである。そして私たちが，善良なハンス・カストルプが実際にそうであったように，自分の生活の普遍的，非個人的基盤を絶対的な，自明なものと見て，それに対して批判の眼を向ける気をさらさら起さないとしても，もしこの基盤に傷んだ個所があったならば，そのために自分たちの精神的健康も本物ではないと漠然と予感することも大いにありうるだろう。我々は誰しも，いろいろな個人的目的，目標，希望，見込みなどを眼前に思い浮べて，そういうもののために高度の努力や活動へと駆りたてられもしようが，しかし私たちを取り巻く非個人的なもの，つまり時代そのものが，外見上ははなはだ活気に富んでいても，その実，内面的には希望も見込みも全然欠いているというような場合には，つまり時代が希望も見込みも持たずに途方にくれている ratlos という実情が暗々裡に認識できて，私たちが意識的または無意識的になんらかの形で提出する問，すなわち一切の努力や活動の究極の，超個人的な，絶対的な意味に関する問に対して，時代がうつろな沈黙 ein hohles Schweigen を持って答としているような場合には，そういう状況は必然的に，普通以上に誠実な人間にある種の麻痺作用を及ぼさずにはおくまいと思う。しかもこの作用は，個人の精神的，倫理的な面から，さらにその肉体的，有機的な面にまで拡がっていくかもしれない。「何のために」という問に対して，時代が納得のいく返事をしてくれないというのに，現在与えられているものの域を越えるほどの著しい業績を挙げようという気持になるのには，世に稀な，英雄的な倫理的孤独と直截さか，あるいは頑健な生命力が必要であろう。[6]」— 人間の生の意味に関する究極的な問に，本質的には，いかなる答も用意せず，ただ「うつろな沈黙」を続けている世界，生の意味を喪失した世界，これが『魔の山』の主人公が生きている世界です。これはまずはっきりと確認しておかなければならないと思う。というのは，この世界の認識がこの作品の前提となっているからです。それは作品の中では，例えば，語手によって次のように述べられているところによく示されている。「(……) もしハンス・カストルプが，人生のつとめの意義と目的とに関して，時代の深淵から，彼の単純な魂を満足させるような何らかの答を受けとっていたとしたら，はじめにこの上の人たちの所へやってくるときに予定していた日数を (……) 延期することはなかっただろう[7]」— 言うまでもなく，ハンス・カストルプの「魔の山」滞在が，予定の三週間で切り上げられていたら，この作品は成立しなかった。即ち，ハンス・カストルプの生きている世界，ひいてはトーマス・マンがこれまで生きてきた世界 — と言ってよいと思うけど — の認識こそ，この作品の成立を可能にしたものなのだ。

F：別の言い方をすると，ハンス・カストルプの「魔の山」滞在の真の目的は，「途方にくれている」世界における生の意味の探究だということ。つまり，トーマス・マンが彼の第三番目の長篇小説『魔の山』において企てているのは，いわば見捨てられかけた生への信頼回復の試み，死と虚無とに圧倒されかけている生を，再度，救出せんとする試み，そう言ってよいのだろう。

L：先の話を続けると，ハンス・カストルプがほとんど無批判に生きてきた世界は，明らかに，またアシェンバハの生きている世界でもある。というのは，いま引用した言葉の「『何のために』という

問に対して，時代が納得のいく返事をしてくれないというのに，現在与えられているものの域を越えるほどの著しい業績を挙げようという気持になるのには，世に稀な，英雄的な倫理的孤独と直截さ(……)が必要である」というくだりは，ほとんどアシェンバハを念頭において言われていると言ってもよいからです。いったいアシェンバハとはどういう人物であったか。名声に照準を合わせ，自分自身とヨーロッパ精神が課した問題をひよわな肩に荷い，孤独のうちに，ただ「やり抜く[8]」をモットーに，たぐいまれな作品を創りつづけてきた作家。生まれつき虚弱で，疲労の極限にありながら，なお毅然として，業績をめざす倫理家。ひとことで言えば，これがアシェンバハだけれど，ここで大事なのは，彼が疑いもなく，心の底に「虚無」をいだいているということです。この「内部の空洞[9]」を彼はこれまで「高雅な自制[10]」によって隠し通してきたわけだけれども。つまり，彼もまたあのハンス・カストルプの「うつろな沈黙」の世界の住人であることは明らかです。

F：『ヴェニスに死す』と『魔の山』の関係，このことで次に言わなければならないのは，両作品の中心モチーフ，「死」あるいは「死の魅惑」についてでしょう。言うまでもなくこれは，今君が指摘した，主人公たちの生きている世界の認識，世界が生の意味を失なってしまったという認識から直接出てくるものです。生きる意味を喪失した世界に広がっているものは，「死」「死の魅惑」「ニヒリズム」というわけだけど，このモチーフの果している役割は，二作品において，ある意味で，全く異なっている。『ヴェニスに死す』においては，言わば，「死」は余裕綽綽とその暴威をふるい，これを遮るものは，ほとんど何もないと言ってよい。『ヴェニスに死す』とは即ち「厳粛な死の物語」であるのに対して，『魔の山』においては，「死」は何としてでも克服されねばならぬ対象であり，またその上，深みのある生を可能にするものでさえある。言ってみれば，作者は，「死」という出立点から，両作品において，全く逆の方向にむかって歩いている。ここに両作品の本質的なかかわりと相違があると言ってよかろうし，また，ここに当時の作者の「生きる姿勢」— 別の表現をすると，『魔の山』執筆の内的動機 — を感じ取ることができるように思う。『ヴェニスに死す』が古くなって衰滅していく世界に根をおろした人間の挽歌だとするなら，『魔の山』は新しい世界に生きて行かねばならぬ人間の模索の物語であると言えばよいだろうか。作者は，『ヴェニスに死す』の爛熟した，そしてその意味で空無化した世界を出て，そこを越えて，生きて行かねばならなかったのだ。

4

L：『ヴェニスに死す』と『魔の山』の関係ということで話が進んできたけれども，このあたりで，両者の関係ということから離れて，『魔の山』の作品世界へは入っていってもよいだろう。そこでまずぼくが問題にしたいと思うのは，この作品においてしばしば見かけられる二重，三重の視点です。ある事物，ある事件，ある現象が見られ，思考され，判断される際に，多くの場合，極めて意識的に複数の視点が用意されている。ところで先ほどのぼくたちの話では，この作品の一つのテーマというか，一つの課題として，死・虚無・ニヒリズムの克服ということがあるということだった。今

言ったいわば複眼的ものの見方は，この課題と明瞭に関係がある。ここで一つ例をとって，この複眼的視点の持つ意味を考えてみよう。ぼくがすぐに思い起こすのは，物語も始まったばかりのところ，第2章の「洗礼盤と二つの姿を持つ祖父について」と題の附された第1節の中で，幼いハンス・カストルプが祖父の死に臨んで，死の持つ二重の性格に「はっきり気づいていた」と述べられているくだりです。つまり，八歳の主人公は「死というものには，敬虔で，瞑想的で，悲痛な美しさに輝く，いわゆる宗教的な面があると同時に，これとは全然違った正反対の，きわめて肉体的で物質的な面，美しくもなければ，瞑想的でも敬虔でもない，本当は美しいとも言えないような面」，肉の腐敗という一面があることに「はっきり気づいていた[11]」というわけですが，ここでは対象は「死」であり，この作品の中心モチーフの一つですが，これが一方で宗教的に見られ，他方で即物的・科学的に見られている。この死に対する二重の視点は，この作品のほとんど全体を通して，様々に変容されて，繰り返されるわけだけれど，この場合の二重視点設定の意図は，全く明らかです。即ち，ここには死の克服という意図がある。死を一面的に見て，つまり，死をただ単に宗教的に見て，死に支配されるのでもなく，また，死をただ即物的に見て，これを無視するものでなく，二重の視点から死を捉えて，これを言わば内にとりこんで克服するという意図があるわけでしょう。

F：そう言ってしまえば身も蓋もない。また簡単にそう言い切れるものかどうか。死の克服という課題と，これを果す一方法としての複眼的視点，ここまではよい。しかし，死・虚無・ニヒリズムの克服という課題は，主人公が果さなければならない中心課題であり，この作品の核心を形成しているものなのだから，もう少し詳しく見てみる必要がある。そこで，まず言われなければならないのは，主人公の本来的性向，所謂叡知的性格は，— この主人公が幼くして「死」の二面を見る眼を持っているということとは別に —「死への共感 Sympathie mit dem Tode」に貫かれているということです。貫かれている，というのは，幼いハンス・カストルプがそうであり，「魔の山」にやってきた青年ハンス・カストルプもそうであり，七年ののちそこを去る彼も依然としてそうだということです。

L：「魔の山」を去る時のハンス・カストルプもそうですか。

F：君は，物語の最後のシーン，弾丸の飛来する戦場で，彼が「菩提樹」を口ずさむのを忘れたのですか。彼は「魔の山」滞在も終りに近い一時期，レコード鑑賞に熱中したのでした。そして，彼が愛好した幾枚かのレコードの中で，最も彼の心にかなったのが「菩提樹」を収めたレコードだった。しかし，彼がこのリートを好んだのは，この曲が「きわめて民衆的な生命にあふれたもの[12]」であったからではない。このリートが「死」の世界を代表し，象徴していたからです。[13]

L：さて，そうすると，死の克服は全く行なわれなかったのかな？

F：この物語は決して子供だましの読み物ではない。子供らしい結論を期待してはならないんです。ぼくが，ハンス・カストルプの本来的性向は「死への共感」に貫かれている，ということで言いたかったのは，死の克服という課題が，ハンス・カストルプにおいては，「自己克服 Selbstüberwin-

dung [14]」という意味を持っているということです。死の克服，それは，「死への共感」に浸されているハンス・カストルプにとっては，他でもない，自己克服の謂なのです。

L：その自己克服がどのように果されたのか，あるいは果されずじまいに終ったのか ― ともかくこの自己克服の過程を最初からたどってみよう。

F：幼くして両親を亡くし，また，「希望も見込みも（……）欠いている」時代状況が個人に与える影響ということからも死に深く親しんできた二十三歳のハンス・カストルプがやってきた所は，ほかでもない，死と病気の世界です。この「上の」世界，「魔の山」の世界について，ここでこまごましたことを言う必要はないでしょう。ハンス・カストルプの自己克服の過程，換言すると，彼の錬金術的教育過程において見逃せないのは，まず，彼がこの「魔の山」にやってきて「生れて初めて，自分がいつかは死ぬことを知った」ということです。第5章第2節「ああ，見える」の診察場面を思い出して下さい。この最初の診断の時ハンス・カストルプは，人体を透視する機械の力をかりて，ヨーアヒムの骸骨と自身の手の骨を，つまり，いとこと自分の「墓場」をのぞき見る。そして、「生まれ初めて、自分がいつかは死ぬことを知った[15]」。己の死を知る，これがハンス・カストルプの錬金術的教育の第一歩です。ここで大事なのは，経験を通じて対象を深く知る，ということ。他人ごとではなく自分のこととして知る，ということでしょう。

L：そう言われてこんな言葉を思い出した，「人間はいつか死に，いつかは死のきよめにあずかるということを考え得ないほど，徹底的に卑俗で有能な人間がいる[16]」と。それはともかく，主人公の錬金術的教育過程は，人文主義者にして進歩と民主主義の信奉者セテムブリーニが，死・病気等に対してハンス・カストルプが示す見解を批判するところで既に始まっているのではありませんか。例えば，「魔の山」滞在三日目，ハンス・カストルプは買物からの帰り道，セテムブリーニと出会い，話を交わすうち，Stöhr という名の「恐ろしく無教養な[17]」婦人患者を話題にして，こんなことを言う，「(……) 無知でしかも病気だということが，ぼくにはひどく奇妙に思われます。この組合せは，おそらくこの世で最も悲惨なものではないでしょうか。(……) 我々人間は，病人に対して誠意と尊敬の念を示したいと思う。病気はある意味で，尊厳なものと言えましょうから。」しかるに，その病人が信じられぬくらい無知な人間であるとなると ―「これは実に人間感情にとって一つのジレンマを意味します。」人は普通「無知な人間は健康で平凡，病気は人間を高尚に，賢明に，特異な存在にすると考えています。そう考えるのが当り前だと思いますが，ちがうでしょうか？[18]」― これは病気というものに対する，「上の」世界にやってきたばかりで，これまで死に親しんできたハンス・カストルプにいかにも似つかわしい，また，ある意味で『ヴェニスに死す』までのトーマス・マンらしい，一般的に言えば，まさしくロマンティシュな見解と言えるでしょう。さて，これに対するセテムブリーニの答はこうです，「病気というものは絶対に品のいいものでも，尊敬に値するものでもありません，― そういう考え方それ自体がすでに病気であるか，あるいは病気の原因となりうるものです。[19]」「あなたにこの際深く銘記しておいていただきたいことは，病気は無知と無関係の上品で

尊厳なものであるどころか，むしろその反対に人間を卑しめるものだということです。— いや，病気は人間という理念を台なしにしてしまういたましい汚辱なのです。(……) 病気で無知 — これは所詮悲惨そのものであって，事はきわめて簡単，つまりそこには憐れみと軽蔑あるのみです。[20]」— ハンス・カストルプの見解に対する反措定。先ほどの複眼的視点ということで言えば，ここではそれは，主人公と彼の「魔の山」における教育者セテムブリーニの二人によって用意されているわけです。

F：以後，多くの場合そうですね。そういう意味で — これは言うまでもないことだけど — セテムブリーニという人物の役割は無視できない。ここで話が少し脱線することになるかもしれないけれど — 君はこの人物をどのように理解していますか。

5

L：ひとことで言えば，彼の意見 (Meinung, Gedanke) は傾聴に値するが，その志操 (Sinn, Gesinnung) には心から感心するわけにはいかない，というのが作者のこの人物の描き方ではないだろうか。例えば，死に対する次のような彼の考えは，死の克服という課題との関連から，決して聞き流すことのできないものを含んでいると思う。これは，肺に浸潤個所を発見されて三週間の安静を命ぜられているハンス・カストルプを，ある日セテムブリーニが見舞って，ベッドのかたわらで，彼がハンスに教えさとすように語る言葉の一節です，「(……) 死に対して健康で高尚で (……) 宗教的でもある唯一の見方とは，死を生の一部分，その付属物，その神聖な条件と考えたり感じたりすることなのです。— 逆に，死を精神的になんらかの形で生から切り離したり，生に対立させ，忌わしくも死と生を対立させるというようなことがあってはならないのです。それは健康，高尚，理性的，宗教的の正反対とも言えましょう。(……) 死は生の揺籃，更新の母胎という意味で，尊敬さるべきものです。生から切り離された死は，怪物，漫画，— そしてさらに厭うべき代物になりさがるのです。独立した精神的力としての死は放縦な力であって，その罪悪的引力は実に大きなものと思われます。しかし，それに人間精神が共鳴する場合は，これ以上に恐るべき倒錯はないこともまた確かです。[21]」

F：その箇所ならよく覚えています。そのとき，セテムブリーニは真剣Ernstであった，と確か，書かれていたはずです。[22]ここにぼくたちは，そのとき作者もまた真剣であった，と書き加えてもいいでしょう。そのセテムブリーニの言葉には，疑いなく，当時の作者の真意がこめられているからです。その証拠に，死に対するその見解は，君も言ったように，死の克服ということと関連して，この作品の中で何度もくり返し語られていますし，また，例えば，『魔の山』執筆中に書かれた『ドイツ共和国について』の中にもこんな言葉を読むことができます，「(……) 死に対する共感が悪徳のロマン主義と化するのは，死を聖化しつつ聖化されて，生のうちに受容されずに独立の精神的な力として生に対置される場合 (……) ではないでしょうか。[23]」— このように，この作品における

最も中心的な対象に関して，セテムブリーニの意見は，作者の意見と一致している，という点からだけ見ても，君の言う通り，この人文主義者の見解は傾聴に値する。しかし，実を言えば，君は今，セテムブリーニの数多くの見解の中でも最も聞きごたえのあるものを選び出したのであって，傾聴に値する意見，意見の正しさ，ということを言うなら，セテムブリーニの強力な論敵，共産主義者にしてイエズス会士レーオ・ナフタの方に軍配を挙げなければならないのではないですか。[24]

L：そうかもしれない。しかし，ナフタのある意味で深みのある意見は，この男の「悪意」「人間憎悪」の精神によって滅茶苦茶にされている。

F：意見と人間，ですか。「どんなに立派なことをいろいろ話そうとも，人間そのものが怪しげだと何にもならない。[25]」ヨーアヒム・ツィームセンの言葉です。そしてこれはどうやら作者自身の考え方でもあったらしい —[26]。それはさておき，ナフタの悪意ということが言われれば，セテムブリーニの「善意」が指摘されなければならないでしょう。君は先ほど，セテムブリーニの志操には感心するわけにはいかない，と言ったけど，彼は善意の人間で，信頼できるのではありませんか。

L：その点はその通りです。しかし，彼が善意の人間だからといって，この人物の，人間としての存在全体が肯定されてよいわけではないでしょう。

F：同意します。しかしもし君が，「善意」というものを，無力で陳腐な美徳であるなどと考えているとしたら，それはまちがっています。他の場所でなら，あるいはそうかもしれない。しかし，この作品においては，明らかに，一つの力を持った精神力として現われています。例えば，「雪」の節の夢の思考を辿れば，これがよく分かります。

L：ぼくが，彼の志操には感心するわけにはいかない，と言ったのは，この民主主義者にして進歩の信奉者が，理性 ragione によって，合理性によって武装しているからです。それを最もよく表わしているのが，あの神秘的な能力を持った少女エリーに対する彼の態度です。彼はこの少女を「悪賢いまやかし者[27]」と断じて省みませんが，それは，この少女の存在と，彼女の能力が，彼の「理性」では律しきれないからでしょう。しかし，少女の存在も彼女の神秘的能力も，嘘いつわりのない現実であり，つまり，セテムブリーニはここで，現実の事態よりも意見を先行させているわけです。ここに彼の浅薄な「合理性」がよく表われています。

6

F：現実の事態より意見を先行させる，— まさしくこの逆を行くのがハンス・カストルプです。ここでもう一度彼に焦点を合わせてみましょう。ハンス・カストルプ，「人好きはするが単純な青年にすぎない[28]」彼が，「魔の山」にやってきて，君がこの対話の冒頭で触れたあの「天才的な道」を歩むことになったのはなぜか。それは，物語の中で繰り返し述べられるところによると，彼が「幼いころから幾度も死に親しんで[29]」いたからです。しかし，それはまた，彼が常に現実の事態に対してできる限り心を開いた人間だからでしょう。ハンス・カストルプとは，ひとことで言えば，生

と死と人間に関する事柄になら考えられる限り心を開いた人間，そう言ってよいように思う。

L：生と死と人間に関する事柄になら，考えられる限り心を開いた人間，だからこそハンス・カストルプは，セテムブリーニにとっても，ナフタにとっても誘惑しがいがある。— さて，そういう訳で，話の順序として次に見てみなければならないのは，彼らの誘惑合戦，ハンス・カストルプを間にはさんでの，二人の論戦でしょうが，彼らの主張する「原理や見解」をきちんと整理することは「非常に困難」ですね。何しろ彼らの論争は，簡単に言うと「全体的交錯，絡み合い，大混乱[30]」ですから。

F：しかし君は，二人の論争を無意味だと言うつもりではないでしょうね。というのも，彼らの論戦の場こそ，君の言う複眼的視点の最も賑やかしい展示場だろうから。例えば人体とは何か。セテムブリーニ：人体とは「神の真の神殿」である。ナフタ：「人体という組織体は人間と永遠とのあいだをさえぎる幕にほかならぬ[31]」。— 複眼的視点。しかし，いったいこれはどこから出てくるのだろう。ぼくの答はこうです，あらゆる一面的ドグマに対する懐疑の精神から，と。そしてこれは，ぼくには，この作品の基本精神とも言わるべき，作品の基盤を形造っている最も本質的要素であるように思われる。ハンス・カストルプが多くの場合示す「保留の態度」を思い出して下さい。この「保留」という姿勢に精神的名を与えれば「懐疑」ということになるのではないだろうか。しかし，ここで急いで附加えておきますが，この懐疑は決して疑うために疑う懐疑ではない。この対話の初めで，「脇道にそれる」というのがこの作品の持っている根本思想の一つだと言いましたが，この作品の基本精神であり，主人公にも附与されている懐疑の精神には，常に，この「脇道にそれる」，つまり，冒険・放将（Abenteuer, Durchgängerei）が結びついているのです。だからこそ，セテムブリーニとナフタの論争にも意味があるのです。この書物の構成を見て下さい。二人の論争が最もはなばなしく行なわれるのは，第6章の第3節と第6節においてですが，すぐそのあとに，主人公の最も徹底した冒険を描く「雪」の節がつづいています。

7

L：ここでどうしても「雪」の節の検討が必要であるようですね。少し詳しく見てみますか。

F：ハンス・カストルプが，スキーを使って雪の山奥深くはいって行き，そこで意味深い夢を見るのは，彼が「上の」世界へやってきて迎える二度目の冬のある日のことです。このときまでに，ハンス・カストルプの意識は「魔の山」での幾多の経験を通して，ある高まりを見せ，生・死・人間に関していったいどのように考えるのが正しいのだろうかという疑問が，彼の心にわだかまっています。この疑問を心底にいだいて，彼は山へはいっていく，と言っていいでしょう。そして，彼は山中を彷徨し，命の危険にさらされる……。さて，このハンス・カストルプの雪の山中奥深くへのスキー行，これをぼくたちは，彼の魂の内奥へむかっての旅立ちと理解することができるかもしれません。というのは，彼は山中を彷徨したのち，あの意味深い夢を見ることによって，人間の本質に

関する一つの真実を知る分けですが，一人間の魂は，その奥深いところで，人間に関して何でも知っているかもしれないからです。

L：プラトンですか。あなたは，プラトンの，人間の魂についてのミュートスが，また，その想起説が，ここに影響を与えていると言いたいのですか。

F：影響云々ということは，この問題を深く掘り下げることのできないぼくには，さして興味がありません。ぼくが言いたいのは，ハンス・カストルプが，人間の本質に関する真実を知ろうとして，他者に対してではなく，自分自身にむかって深く問うているのだ，ということです，（彼自身はこのことに半ば無意識であるとしても）。それが，雪の山中への冒険となって表われているのではないでしょうか。

L：次はハンス・カストルプの見る夢ですが，これは，あなたが先に言ったように，「大いなる夢，Großer Traum」とでも呼ばるべき性質のものですね。というのは，この夢は，ぼくたちが常日頃見る「小さな夢」とははなはだ趣きを異にしていますから。

F：現実の人間がこのような夢をみれば，おそらく，その人の人生の一大転機となるような夢です。ハンス・カストルプの場合，語手によってはっきり述べられているように，[32] 彼は夢の内容をその日のうちにも半ば忘れてしまうのだけれど，この夢はやはり，彼の意識の下にあって，彼を律しています。例えば，先に見たショーシャ夫人と対話している彼は，明らかに，この夢の指導下にあると言っていいでしょう。しかし，先走らずに，この「大夢」の内容を見てみましょう。夢は非常に明確で無駄がなく，二部構成になっています。初め夢は，普通の夢のごとく「映像 Bilder [33]」を持って現われます。緑あふれる木々，光輝く海，愛らしい鳥の声，壮麗な虹。それは南国のこよなく美しい入江です。そして，そこに大勢の若者たちが遊んでいる。ある者は馬を駆り，ある者は弓をひいている。一群の少女たちが楽しく舞っている。若い男女がむつまじく語らっている。そして，彼ら太陽の子らが他に示す親愛のそぶり。堅苦しくない礼儀正しさ。品位。— この美しい眺めにハンス・カストルプは心から感動します。

しかし，この入江を見下す丘陵の中腹の石段にすわっていた彼が，目を後方に転ずると，場面は一転します。そこには古びた神殿があって，その神殿の中に彼が這入って行くと，そこでは魔女に似た老婆がふたり，嬰児を引き裂いて，むさぼり食っているのです。ハンス・カストルプはこのものすごい光景を目にして恐怖に襲われ，神殿から逃げ出そうとして，半ば目をさまします。— これがハンス・カストルプの「大夢」の第一部ですが，この夢が表わしているのは，人間の本来この世にあるところの姿，人間存在の原像と言ってよいでしょう。アポロン的なものとデュオニュソス的なもの，神的なものと悪魔的なもの，善なるものと悪なるもの。

しかし，夢は，この映像による夢で終らないで，これに「言葉による gedankenweise [34]」 夢が引き続きます。この言葉による夢は，この作品の中心理念を語っていると見てさしつかえないと思うけれども，それは「中間 Mitte の思想」とでも呼ばるべきものです。

まずハンス・カストルプが夢の中で考えることは，この「大夢」，意味深い夢の出所についてです。「実に魅力のある，そして，恐ろしい夢だった。ぼくはこれを実のところずっと知っていた，これはみんな自分で作り上げたことだ（……），しかしどうしてああいうことを知っていたり，自分で作り上げたり，あんなに喜んだり，こわがったりすることができるのだろう？（……）夢は，自分の魂からだけでなく，それぞれに違ったものであっても，無名で共同で見る，とぼくは言いたい。ぼくはその一小部分にすぎない，大きな魂Die große Seeleが，多分ぼくを通して夢みるのだろう，ぼくの場合はぼくなりの形で，その大きな魂がいつも密かに夢みていることを，— その魂の青春，希望，幸福と平和を……そしてまたその血の饗宴を。[35]」

夢の出所とその顕現に関するこのような考えが，例えば，ユングの「集合的無意識」の説を思わせるものであり，また，この考えを作者に直接教えたのがニーチェの著作であったことは，[36] 評家が指摘しているように，疑いないでしょう。しかしながら，ここでぼくが注目したいのは，このような考えの客観的真実性や影響関係ではなく，作者がこの考えをここに持ち出している事実であり，その意味しているところです。ハンス・カストルプの魂がその一小部分であるような，ある「大きな魂」，これが学問Wissenschaftの用語で正しくはどう呼ばるべきかはしばらく置いて，この「大きな魂」とは，言わば，ハンス・カストルプの属している「心の共同体」の謂でしょう。ここで作者がこの「大きな魂」というものを持ち出して言わんとしていることは，個人が意識的にしろ無意識的にしろ，それに属している一つの大きな共同体の実在ということではないだろうか。この共同体の実在を信ぜずしてハンス・カストルプの夢の意味するところは不可解なのであり，これを信じて初めて，その意味するところは明らかになる，つまり，それは大きな共同体の夢，人類という大きな共同体の夢なのだ — 作者はそう言いたいのではないだろうか。

そこで次の問題はこうです，しかし，なぜ，そのような大きな夢が，ほかでもないハンス・カストルプという名の魂を通して現われたのか —

「（……）ぼくはここにこうして横たわって，こういうことを夢みるれきっとした権利を持っている。ぼくはこの上の人たちのところで、放埒Durchgängereiと理性Vernunftについて多くの経験をつんできた。ぼくはナフタやセテムブリーニと一緒に，ひどく危険な山の中をほっつき歩いた。ぼくは人間のことならなんでも知っている。[37]」

「大きな夢」がハンス・カストルプの魂を通して現われたのは，彼が人間について多くの知識と経験を積んだからである。ぼくたちの言葉で言えば，彼が「脇道にそれる」ことを厭わなかったからである。そして今やすべてのことが明らかになった —

「ぼくは人間の肉と血を知った。（……）しかし身体を，生命を知る者は，死を知る者だ。ただそれがすべてではない（……）。それに他の半分を加えなければならない，反対側を。なぜなら，死と病気に寄せる一切の関心は，生に寄せる関心の一種の表現にほかならないからだ，ほかでもない医学という人文主義的学科が証明しているように（……）[38]」

L：言わば死と生の弁証法。それはこの作品における最も本質的でヘルメーティシュな「論理」だけれども，既に第５章の「フマニオーラ」の節で，ハンス・カストルプとベーレンスの間で展開されたものですね。そこでは次のように言われたのでした。— 人間の死に際して起こる肉の腐敗と分解は酸化作用である。一方，生命も酸化作用である。「生命もまた，大体において，細胞蛋白の酸化燃焼にすぎない」。だとしたら，「生とは死」である。生とは，「有機的破壊」である。「『すると，ぼくたちが生に興味を持つ場合，』とハンス・カストルプは言った。『ぼくたちはとくに死に興味を持っていることにもなりますね。(……)』[39]」— というわけです。

F：死に深くかかわりながら，死に支配されることなく，あらゆる手立てを尽くして，生へ至る道をうち開くこと，これはこの作品が主人公に課した中心課題ですが，ここでハンス・カストルプはこの解決を，半ば医学の力をかりて行なおうとしていることは，注目に値すると思う。この作品において医学という学問の果している役割は無視できない，つまり，ハンス・カストルプの生理学や解剖学の研究は，単なる暇つぶしの慰み事ではなく，死の克服という中心問題と深くかかわりあっているのです。

さて，ぼくらはここにハンス・カストルプの，死と生の対立解消への第一歩をみたわけだけど，もう少し彼の夢の思考を辿ってみよう。

「死と生 — 病気と健康 — 精神と自然，これは果して矛盾するものなのだろうか？ぼくは問う，それが問題だろうかと。いや，問題ではない(……)。死の放埒は生の中にあり，それなくしては生が生でなくなるだろう。そして，その中間にこそ神の子たる人間の立場があるのだ，— 放埒と理性のただなかに，— 丁度人間の国家も，神秘的な共同体と吹けば飛ぶような個体との間にあるように。(……) 人間は対立の支配者で，対立は人間より生ずる，だから人間は対立よりも高貴なのだ。人間は死よりも高貴で，死だけにつくには高貴すぎる — これが人間の頭脳の自由である。人間は生よりも高貴で，生だけにつくには高貴すぎる — これが人間の心の敬虔である。[40]」

L：まさに詩ですね。「人間についての夢の詩[41]」。しかし，それにしても，— 話は「脇道にそれる」けれども — トーマス・マンもはるばる長い道を歩いてきたものだと思う。というのは，ここに表明された「中間の立場」，あるいは，ここに立つ人間たちを，トーマス・マンという作家は文学的出発の当初から，絶えず描き続けてきたと言えるのではないだろうか。至極大雑把な言い方だけれど，自分は「実務家なのか，夢想家なのか[42]」と苦悩するトーマス・ブデンブロークにおいても，市民と『美」の二つの世界の間に介在して，「いずれにも安住していない[43]」トーニオ・クレーガーにおいても，また，精神と生としての芸術の対立を描く『フィオレンツァ』においてさえ，それぞれ問題の平面は異なるとは言え，同じ「中間の立場」に深い意味合いがあるのではありませんか。

F：その点について，ここで詳しく述べることはできないけれども，「中間の立場」，つまり，ある一つの，一般に承認された絶対的立場を取れない，あるいは，取らない，ということは，トーマス・マンという作家にとっては，何か本質的な事柄なのだと思う。この極めて倫理的な作家において，

一つの主要な問題として，生の救済ということがあったとするなら，「中間の立場」とは，この救済を可能にする唯一の積極的な立場なのではないか。「中間の立場」，これは全く消極的なものを意味していない，妥協的なものを意味していない。つまり，この作家が目差しているのは，―― ある一面的見解を取ることによって，部分的生を生きるのではなく，― 全体的な生，生の全体性なのだと思う。ここで話はぼくたちが今見たハンス・カストルプの「夢の詩」になると思うけど，ここで希求されているのは，言うまでもなく，死の克服ということです。しかし，それが単に死を無視することなくなされねばならない，という意味は，死を克服して到達する生が全体的生，生の全体性であるから，と言えるでしょう。―

さて最後に，ハンス・カストルプの夢の思考の結末を見ておこう。それは彼の倫理的決意です。

「ぼくは善良でありたい。ぼくは自分の思考の支配権を死に明け渡すまい。ここにこそ善意と人間愛の本質が存するのであり，そのほかのどこにあるわけでもないのだから。(……) ぼくは心の中で死への忠誠を守ろう。だが，死と，過去とに対する忠誠は，もしそれが我々の思考と「陣取り」を規定するならば，ただ悪意と暗国の情欲と人間への敵意を意味するにすぎないということを明白に記憶しておこう。人間は善意と愛のために，己れの思考の支配権を死に明け渡してはならない。[44]」

8

L：どうやら結論が出たようですね。ぼくたちの話もこの辺で切り上げようか。

F：決して結論など出やしません，意義ある小説作品においては。ぼくたちの人生においてと同じように。可能性です。― ぼくたちが先に言ったように，この作品の荷っている主要課題が，死・ニヒリズムの克服というものであるとするなら，この課題解決の可能性です。そして，その意味で，この作品は現代における一つの野心的な試みです。一方において虚無に流れ，他方において合理化されて，ますます豊さを失っていく現代人の魂を回復せんとすると同時に，そこから野蛮に陥らず，善きものの裡に生きようと志向する一つの野心的な試みです。

註

『魔の山』その他トーマス・マンの作品からの引用訳文は，概ね，新潮社版全集の当該作品の訳文に従ったが，論述その他の都合により表現を多少改めたところもある。引用訳文について原文が必要と考えられた場合は，「註」において，それを示す。トーマス・マンの著作の原典は，

Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden (S. Fischer Verlag) 1974

を用いた。この中からの引用は，「註」においては，作品名と巻数とページ数のみを示す。

(1) Einführung in den ＞Zauberberg＜, XI, S. 611

(2) Der Zauberberg, III, S. 827

Zum Leben gibt es zwei Wege: Der eine ist der gewöhnliche, direkte und brave. Der andere ist schlimm, er führt über den Tod, und das ist der geniale Weg !

(3) Hans Eichner: Thomas Mann, Eine Einführung in sein Werk, S. 49, Zweite, veränderte Auflage, Francke Verlag, Bern u. München, 1961

(4) Einführung in den ＞Zauberberg＜, XI, S. 606f.

(5) Thomas Mann: Thomas Mann an Ernst Bertram Briefe aus den Jahren 1910-1955, S. 18, Erste Auflage, Günther Neske Verlag, Pfullingen, 1960

(6) Der Zauberberg, III, S. 50

(7) ebd. S. 321

(8) Der Tod in Venedig, VIII, S. 451

(9)(10) ebd, S. 453

(11) Der Zauberberg, III, S. 43

(12) ebd. S. 906

(13) siehe ebd. S. 904ff.

(14) ebd. S. 907

(15) ebd. S. 306

(16) Süsser Schlaf, XI, S. 338

(17) Der Zauberberg, III, S. 137

(18) ebd. S. 137f.

(19) ebd. S. 139

(20) ebd. S. 140f.　圏点部分は原文斜字体。

(21) ebd. S. 280　圏点部分は原文斜字体。

(22) ebd. S. 280

(23) Von deutscher Republik, XI, S. 851

(24) siehe Der Zauberberg, III, S. 660

(25) ebd. S. 534

(26) siehe Thomas Mann: Briefe 1889-1936, S. 351 S. Fischer Verlag, 1962

(27) Der Zauberberg, III, S. 926

(28) ebd. S. 9

(29) ebd. S. 279, vgl. ebd. S. 827

(30) ebd. S. 646

(31) ebd. S. 628

(32) siehe ebd. S. 688

(33)(34) ebd. S. 683

(35) ebd. S. 683f.

(36) vgl. Manfred Dierks: Studien zu Mythos und Psychologie bei Thomas Mann (Thomas-Mann-Studien, Zweiter Band) S. 123ff. Francke Verlag, Bern u. München, 1972

(37) Der Zauberberg, III, S. 684

(38) ebd. S. 684

Ich habe sein 〔Menschen〕 Fleisch und Blut erkannt (…). Wer aber den Körper, das Leben erkennt , erkennt den Tod. Nur ist das nicht das Ganze (…). Man muß die andere Hälfte dazu halten, das Gegenteil. Denn alles Interesse für Tod und Krankheit ist nichts als eine Art von Ausdruck für das am Leben, wie ja die humanistische Fakultät der Medizin beweist (…).

(39) ebd. S. 370 ff.

(40) ebd. S. 685

Tod oder Leben—Krankheit, Gesundheit—Geist und Natur. Sind das wohl Widersprüche ? Ich frage: sind das Fragen ? Nein, es sind keine Fragen (…). Die Durchgängerei des Todes ist im Leben, es wäre nicht Leben ohne sie, und in der Mitte ist des Homo Dei Stand—inmitten zwischen Durchgängerei und Vernunft—wie auch sein Staat ist zwischen mystischen Gemeinschaft und windigem Einzeltum. (…) Der Mensch ist Herr der Gegensätze, sie sind durch ihn, und also ist er vornehmer als sie. Vornehmer als der Tod, zu vornehm für diesen, — das ist die Freiheit seines Kopfes. Vornehmer als das Leben, zu vornehm für dieses, — das ist die Frömmigkeit in seinem Harzen.

(41) ebd. S. 685

(42) siehe Buddenbrooks, I, S. 470

(43) Tonio Kröger, V III, S. 337

(44) Der Zauberberg, III, S. 685 f.

Ich will gut sein. Ich will dem Tode keine Herrschaft einräumen über meine Gedanken ! Denn darin besteht die Güte und Menschenliebe, und in nichts anderem. (…) Ich will dem Tode Treue halten in meinem Herzen, doch mich hell erinnern, daß Treue zum Tode und Gewesenen nur Bosheit und finstere Wollust und Menschenfeindschaft ist, bestimmt sie unser Denken und Regieren. *Der Mensch soll um der Güte und Liebe will dem Tode keine Herrschaft einräumen über seine Gedanken.*